

しかし茨城県にはもうひとつ顔があるのです。県北部の農山村地帯。海岸線を除けば、この地帯は東から里川、山田川、久慈川、そして緒川の諸川に沿って拓けた四本の山合いの沢とそれを囲む山々によって成り立っているのです。里川と山田川は久慈川に合流して太平洋に注ぎます。緒川は県北ならぬ県央の川、那珂川に合して太平洋に流れ出ます。だから県北山間部の多くは久慈川をもつてその心の故郷とする、こう言つてよいかかもしれません。

—茨城県北部農山村の中心地

茨城県久慈郡大子町

今年十月中旬に予定される第三十一回村研大会の会場設営を担当した茨城の村研会員は着々と準備を進めています。県の外から眺めるとき、茨城といって念頭に浮ぶのは、南に県境を画して流れるあの大利根、田畠・平地林入り混つて拡がる平坦な関東平野、霞ヶ浦、筑波研究学園都市、そして鹿島灘に沿つてゆるやかな曲線を描く海岸線、そこに戦後立てした鹿島コンビナート、原子力諸施設、あるいは明治末、県北部海岸に近い日立鉱山の附屬工場から生れて発展した日立製作所、などでしょう。あるいは大洗を介しての海のイメージも。

大子町はこの久慈川の上流にある茨城県北部農山村の中心地です。往古は措くとしても、水戸藩に属した近世このかた現代に至るまで、この大子町域は日本の歴史を垣間みるに足るような事実を刻みながら歩んで来ているのです。幕末の新興ブルジョアジーと尊攘派の下級武士たちとの結びつき、そして諸生・天狗にわかった抗争、明治末以降の鉄道建設をめぐる政党と地域社会、専売局からは自立して明治三十八年以降同業組合形式をとり続けた大子煙草生産同業組合。この前提には明治十年代の農談会このかた活潑な農事改良の活動がありました。

昭和になると、同二年には農事組合員中の精麿によつて演劇「栄えゆく村」が上演され、八年には経済更生運動の中で、続編「更生の巻」が創られ、十二年には映画化されています（この映画は時間が許しますならば村研大会で活弁付きで上映したいと思います）。橋孝三郎が主催する愛郷会の支部も昭和六年には町域の袋田に設けられています。

ともかく『研究通信』のスペースがいただけなら、「横顔その(2)」、「その(3)」と続け、村研大会に相応しい「土地」柄にしてゆきたいと思っています。

（東敏雄会員）